

第3回牧之原市教育のあり方検討委員会 会議録【概要】

1 日 時 平成30年4月18日(水) 13:30~16:30

2 場 所 牧之原市役所相良庁舎4階大会議室

3 出席者

(委員) 島田桂吾、加藤百合子、野村智子、佐藤利彦、橋山妙子、今野英明、中島佑実、石井眞澄

4 協議事項議事録【概要】

施設・体制について

- 人口減少は誰も経験していない未踏の地。社会全体で「次世代を生き抜く力」を育成することが大きな目標になる。そのためにどんな取組が必要で、どんな体制や施設が必要か。
- 時代にあわせた教育に変えていくと人口も増え「選ばれる牧之原市」になるのでは。
- オープンスクールもよい。
- 牧之原市は単学級の学校が多く、人口推計を見るとこれからはほとんどの学校が単学級になっていくことが見えるが、それぞれのよさも活かしたい。
- ICT環境整備をスピード感を持って行う。
- 「対話」のスキルをある程度教える必要もあるが、少し与えれば子どもたちで学ぶことができるし、学習支援サポーター等で地域の人に関わってくれる中の副産物として対話力があがったりするのではないか。
- 家庭や就学前教育から行っていくべきで、「学校」だけで育てようとするのではなく「社会全体で育てる」というようなパラダイム転換が必要。
- 人口減少を見越すとある程度集約させて施設数を減らすことも必要。
- 生きる力の基礎基本や学びのプロセスで、各発達段階を明確に区切っていくことも必要ではないか。子どもの主体性がベースであること。いろいろな人と交流するということも必要。交流するには交通手段の確保も大切。
- 担任2人制、学校支援システム等、個に応じた教育をするために、教員の負担を軽くして、教員が子どもに十分に力を注げる体制が必要。
- 大きい学校の方が保護者の意識が低く、保護者の参加が低くなっている。
- 周りの環境を整えていくことも大事だが、まずは当事者や保護者の意識変容に至らないと根本的な解決を図ることは難しい。

以上の意見から、次の4つの項目立てをする。

① 主体性をベースにした個の育成

例：子どもの主体性、個性、人としての育成、家庭教育

主体性をベースとした個の育成がこの時代を生き抜くには必要ではないか。与えられるより、子どもたち自身が主体的に選んでいく。アジアは集団から見た個、欧米は個ありきで、集団は意識されているか分からない。まずは個を大切にすることを土台にしていくのは必

要で、家庭教育を充実させていく。そこには保護者の支援や意識も必要。

② 子どもが人とふれあう機会を確保する

例：学級規模、対話、人と人との交流、複数の目

子どもが人と触れ合う機会を確保する。単学級は、子ども同士が触れ合う機会が少ない、保護者は小さい学校の方が触れ合う機会が多いかもしれないという話があった。交流する量と質をどう両立させていくか。これから人口減少する中で、人と触れ合う機会も減っていく。これをどう補い、増やしていくか。これは手段であり、そこから1つめの個の育成に繋がればいいのかと思う。多様な価値観に触れる機会にもなる。

③ 次世代を見据えた施設設備・体制の充実

例：ICT、教員の働き方改革、2人担任制、保護者がわかりやすい構造

次世代を見据えた施設整備。ICT、働き方改革、保護者が分かりやすい構造というのもあった。建物と中身も併せた検討が必要。

④ 社会全体で育てる（育つ）パラダイム転換

例：学習サポーター、生きる力の基礎・幼児教育と企業との連続性、保護者参画、PTA活動

社会全体で育てる仕組み。パラダイム転換が必要で、今までの学校のことは学校の中で完結するのではなく、広く社会みんなで育てる体制をつくっていくことは必要。地域でサポートする、幼児期からの接続、企業や保護者の参画する仕組みがあるともう少し濃密になると思った。

以下、①～④を深める話し合い。

- 社会全体で子どもを育てる部分については、学校は知識、家庭は社会に生きていくための基礎だが、今は家族像が変容していて難しい。残されているのは地域しかない。
- 今の大人も体験したことがない社会を子どもたちは生き抜いていけないといけないので、そこを生き抜くには相当、課題解決能力をあげていかないと難しい。
- 教員が子どもたちの指導以外のところ、雑務に時間を取られるので、そのサポートがあると、もっと子どもに時間を使えるのでありがたい。
- 日本人の性質かもしれないが、発信能力が弱く、発信する手段の英語についても、その発信したい意欲や思いがないと使うことは難しい。主体性がある、英語教育をすれば幅が広がっていく。
- 学校は企業のように外注できるものは外注する方がよい。
- 「共育」共に育つ。上から目線で社員に対して教育するのではなく、共に育つ、共に学ぶということで「共育」。保護者や学校の先生にも常に学んで共有してもらうことが必要。
- 地域には、仕事を引退した人がいる。寺子屋のような放課後に学ぶ場として、地域と関わって、引退した人などがやれることをしてくれるとよい。

- 多様な個性の中でどう自分なりの人生を導いていくかということも必要になり、そのためには、多様な人との関わりや触れ合う機会が重要になってくるのではないか。
- 次世代を見据えた施設として、ICT も必要である。
- 学校の先生は忙しいところもあるので、学校がやるべきこととそうでないことの線引きをする仕組みとして、社会全体で育てていくという仕組みをどう考えていくか。
- 主体性や、子どもが触れ合う機会を確保するというところで言うと、キャリア教育というところにもつながるのかと思う。キャリア教育は計画的に学んでいくということもあるが、実は偶然に決まってしまうこともあるので、偶然の数を増やしていくことが必要ではないか。
- 単学級が多いのであれば、人と触れ合う機会をどう増やしていくのかということや、10,20年先をどう生きていくか。社会との接点で大きな流れを見ながらも、自分がどんな生き方をしていくかということを学校、家庭、地域、社会全体で見えていく仕組みが必要となると思う。